

# 頭でつかち、心寒々の幼稚園教育

## —ひが眼音楽教育論—



服部公一

人間頭がよければすべてうまくいく、と思つたら大まちがいの  
コンコンチキである。

頭なんか少々よくないやつの方がたいていうまくいく、と言つ  
た方がむしろ当たっているかもしれない。

頭のいいやつは物事の理解が早く、したがっていろいろ得をす  
るように見えるが、そんな得はたいしたものではない。

それに頭のいいやつは出世するけれども、逆にうんと悪いこと  
をするやつも多い。いやなに、大出世をして一國の指導者とな  
り、その國を破滅に導いたりするやつも歴史上では、ちよくちよ  
くお目にかかるから、頭のいいやつほど、充分に氣をつけない  
と、トンデモナイ方向に行きがち……。やっぱり人間は、頭があ  
まりよくない方がいい、という結論になるのだが、こんな結論を

信じている人もめつたにいない。

わが子よ、頭よくあれ、というのが、世界中の親たち共通の願  
いであろう。

「いえね、うちじゃ子どもにいつてるんですのよ。お友だちと  
仲よく遊ぶのよ、お勉強なんかより、健康が第一ですよって。わ  
んばくでもいい、たくましく育てほしいっていうのがうちのモ  
ットーですから、オホホホ……」

なんて一見のどかなことを言っているママの胸のうちのをのぞけ  
ば

「うちの子毎日々々日暮まで遊びくらして、本当に大丈夫なの  
かしら。うちのパパがきちんと注意してくれないものだから子ど  
もはすっかりノンキになっちゃう。」

今は幼稚園だけだ、これから小学校、中学校、大学、就職、結婚……って考えると、どうしても、一流のトコロテン式小学校に  
いれなければ……。そうだ、明日っから、あの子を進学塾へたた  
きこんで、しばらくなくちゃいけないわ。ぐずぐずしていると手遅れ  
になるわ……」

というようなケースが多い。

ママ族のこのような考え方は、幼稚園の教育にも敏感に反影  
し、そのカリキュラムは、知育、つまり、頭中心のものになって  
くるのは仕方ないことだ。

現在の日本において頭の教育とは、つまり言いかえれば、もの  
を教え込みながら教育のことである。

頭の働きたか、創造力とか……そんなものよりも片々たる知識  
のつめ込みの方が楽にできるし、その結果を知ること容易だ  
し、せつちかちママたちもその即席ラーメン的な成果にご満悦……  
とくれば、一石二鳥どころか、三鳥にも四鳥にもなってくる、こ  
んなイイコトヤメラレナイ、というわけで、そこいら中の幼稚園  
で小学校の算数や国語や社会はたまた、英語などの真似事をやら  
かしてママたちのごきげんをとりむすんでいるありさまである。

こんな風潮の昨今、わが「音楽」などは風前の灯で、幼稚園教  
育ではまったく、みそっかす扱ひされているのかというと、これ  
がまたそうではないからおもしろい。

情操教育という美しき大義名分のもとに盛んに行なわれている  
のだから、音楽屋のはしくれを自称している私としては、まった  
くめでたしめでたしであるはずなのであるが、ドッコイそう手ば  
なしで喜んでいられないわけがあるのだ。

そのわけは、二つあるのであるが、それをこれから紹介させて  
いただくことにする。

第一のわけは、音楽を知識の一つとして子どもたちに与えてい  
る、ということだ。

音楽とは読んで字の通り音を楽しむことである。もうひとつ言  
いかえれば、音遊びの楽しさこそ、音楽本来の喜びでなければな  
らない。

読譜や楽典をマスターしなくては本当の楽しみは存在しないな  
んで、そんなかたいこと言いつこなし！

読譜や楽典とは全く関係なしのホットントットでも、山家の爺  
さんでも、みなそれぞれの音楽を楽しんでいるではないですか。

「いや彼らの音楽は、音楽と称することすらはばかられる、低級  
なもの、あんなものと音楽教育の場で使用する音楽とは大いにち  
がっているのだ、われわれはベートーベン、ショパンと関りを持  
つ……」なんてぬかす不思議な人もいる。ホットントットの音楽  
と、ベートーベンの音楽と、かなり異質のものであることは認め  
よう。しかし、もとをたどっていけばみな同じものである。

それに、音楽の高級と低級なんてどこのだれが、どうやってきめたものなのか、……不思議なことだ。

世のママ族はすぐこう言う。

「音楽教育っていうものは幼児期に身につけておかないとだめなんでしょう。だから手遅れにならないうちに一日も早く先生のところにつれていってやろうと思いますの。」

教養の一つとして、音楽を知っているということは将来すいぶんプラスになるって申しますからね……」と。

音楽を知らしめるため、読譜や楽器演奏の技術を身につけさせるためにレッスンをうけさせる……これはいわば音を楽しむ手段の習得であって、目的ではないはずなのである。

そしてママ族はここで目的が達せられたと浅はかにも思ってしまう。

この現象はレッスンだけではなく、幼稚園における音楽教育にも及んでいる。

園児一同が先生と一緒にあって、おゆうぎをしたり、変テコな声をはり上げて合唱ならぬ、雑唱を楽しんだりするとママたちは不満である。

「何です一体、あんな幼稚なことはかりやって。もっと、程度の高い音楽のお勉強をさせていただかなくっちゃ、幼稚園にうちの子をやっているかいないわ。先生たちも、もっと、がんばっ

て、やっていただかなくちゃ……」とくる。

私は誓って言うが、こんなママの言葉を先生たちは、ゼ、ッ、タイにうけ入れてはならぬ。これは將に悪魔マキのささやきと理解すべきだ。

幼稚であろうが何であろうが、音楽を楽しく遊んでいるからこそいいのであり、このたわいなくも楽しい音楽遊びこそ、ママの大好きな情操教育の特効薬であるということを、この際再確認しておきたいものである。

音楽は体中を使って、演奏することに意義がある、口で……いや声帯で……歌を歌い、あごにはさんでバイオリンを奏で、手指でピアノを弾き……といってもそれは演奏技術のことだけであり、いつの場合も、音楽は体中をかけめぐり、体中が反応し、ゆえに音楽は楽しいものである。

一見ばかばかしい音楽遊びこそ音楽の楽しみ本来の姿であり、知識だの技術だのはその喜びをより大きくする補助手段にすぎないのだ。

さて第二のわけである。

これは少々言いにくいことなのだが、いかんせん、幼稚園の先生たちの音楽能力がひくいということである。

ばかばかしく楽しい音楽遊びを幼児と共にするために、先生

が音楽的実力者でなければならぬ。

先生が放射線を出して音楽の環を作り、その中に子どもたちを巻き込まなくては楽しい音楽遊びは不可能である。これは、いわゆる、モータイベーション（動機づけ）とそれにつづくエンゲージメント（参加）の合体したものと考えていただければいいだろう。

音楽の楽しさの環をつくるのに第一に大切なことは、先生自身が音楽を楽しむことである……というあまりにもあたりまえの答が返ってくる。

しかし、音楽を楽しまない先生たちが、幼稚園には何と多いことか。それどころか、音楽を敬遠し、拒否し、逃げまわる先生たちすらいるのである。

これは先生たちの、音楽教育の認識の甘さ、不勉強、もさることながら、教員養成大学における、彼女らのうけた教育の欠点も考えなければ片手落ちであろう。

馬鹿の一つおぼえのように、どの大学や短大でも、バイエル、チェルニー、ソナチネをくり返す。ピアノ演奏技術という、最も差のつけやすいコースで学生をコソクにしほって見たところで、一体本質的に何の利益があるのだろうか。

それよりも鍵盤和声（ピアノのような鍵盤楽器を使って和音並びに和声の基礎を学ぶやり方）を中心にした、組織的な音楽教

育者用、音楽実習”を行なわなければならないはずだ。

この大学生たちが、数年後には学校や幼稚園で実際の教育にたずさわることを考えてみれば、もっと本質的な教員養成カリキュラムこそ望まれるのである。

それにしても音楽とは、情操教育とは、成績のつけにくいものであるから、教員養成の場まで、現状のような、似て非なる教育をやっているのであらう……と考えるとき、ヘソ曲りの私もうそ寒くなってしまうのである。

再び現場の幼稚園に眼をむけてみるに、音楽教育なんていう、抽象的<sup>ちやうしょうてき</sup>で、答のはっきり出ないテーマにとり組むよりは、アルファベットか、英語片言を教えたり、掛算の九九でもやっている方が先生方の処世術としては賢明であり、らくでもあらう。

知育偏重の今の教育はかくしてどんだん心は寒々しく頭でっかちな、いわゆる優秀な子をどんだん生みだし、その結果、世界は確実に被滅<sup>ひめつ</sup>にむかい、日本はもうじき沈没するはずである。

（作曲家）